ISSN 0919-4339

# 九州大学
# 大学史料室ニュース

第24号　2004.10.31

目　次

留学生史研究におけるインタビューの意義……2
　―元九州帝国大学生へのインタビューを行って―
広島大学文書館の特色……4
九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿……6
九州大学大学史料室名簿……6
受贈図書一覧……6
大学史料室日誌抄録……8

「實事求是」を揮毫する郭沫若（1955年12月17日。於総長室）

九州帝国大学における留学生中、最も著名な人物の一人である郭沫若（1892～1978。本名郭開貞。中国四川省楽山県出身）の母校再訪時の写真である。郭は第一高等学校特設予科（東京）、第六高等学校（岡山）を経て、1918（大正７）年９月、本学の医科大学に入学、23年３月に卒業した。聴覚障害のため医業を断念したが、後に中国を代表する詩人、作家、政治家となった（郭沫若に関しては、武継平『異文化のなかの郭沫若―日本留学の時代―』〈九州大学出版会。2002.12〉を参照）。戦後の1955（昭和30）年12月、中国科学院院長の郭沫若は訪日学術視察団団長として32年ぶりに母校を訪れた。写真で揮毫している「實事求是」は、一時「三畏閣」（第三学生集会所）に掲げられていたが、現在は学務部長室に置かれており、九州大学の貴重な文化遺産となっている。

# 留学生史研究におけるインタビューの意義
## —元九州帝国大学生へのインタビューを行って—

陳　　昊

現代人の価値観からすると、留学は自己成長過程においてどのように人生を切り拓いていくのか、といういわゆるキャリアアップの行為と言えるかもしれない。現在、多くの日本人が自己実現のために海外に赴く一方、来日の外国人留学生の数もすでに11万人を越えた。その9割以上が中国、韓国、台湾、マレーシア、タイ、インドネシア等のアジア出身者であり、筆者自身もその中の一人である。日本におけるアジア人留学生受け入れは、1881（明治14）年の朝鮮人の慶応義塾、同人社への入学に遡り得るが、爾来今日まで120年以上が経った。悠々たる歳月の中、平時でも、戦火の飛び散る非常時でも、大勢の若者達が様々な「思い」をもって日本に留学してきた。留学生達は日本に何を期待し、また日本はどういうまなざしで彼らに対応してきたのだろうか。これらの課題は筆者の問題関心の一つである。

2002年4月、筆者は「九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究」（研究代表者＝折田悦郎九州大学大学史料室助教授）というプロジェクトの研究協力者になるチャンスを得、帝国大学期の留学生受け入れ状況の調査に参加した。九州大学は、1910年、朝鮮出身の留学生を初めて迎え入れて以降、1945年まで合計733名の留学生を受け入れた。私達は関係書類等、一連の基礎史料を整理・調査したが、当時の留学生の生活・学習状況等を明らかするには、当事者に直接話を聞くことが一番だと考えて、各学部の同窓会名簿を調べ、インタビューの可能な方を探し出そうとした。この作業は留学生の高齢化に伴い難渋したが、一つの手掛りも見逃さないようにし、何度も国際電話を掛けて、ようやく中国国内に二人のインタビュー可能な元留学生の方を探し出すことに成功した。

鮑耀東氏とご子息の鮑鵬氏

2003年9月4日、早速筆者は、同じ研究室の先輩佐喜本愛氏と共に上海経由蘇州に赴き、翌日から二回にわたって、1940年4月医学部入学の鮑耀東氏（1920年生、原籍広東省）へのインタビューを行った。面談に際してまず私達は、日本を離れて60年近く経つ彼の流暢な日本語に驚いた。インタビューの半分は、私達が直接日本語で質問し、それに鮑氏が日本語で答えたものである。彼は、当時の一般的な留学生とは異なり、イギリス商社に勤務していた父親の関係で日本に生まれ、日本で育ったとのことである。鮑氏の日本での進学・社会への定着はある意味当然のようにも思われた。「日本での開業は考えませんでしたか？なぜ帰国されたのですか？」という私達の素朴な質問に対しては、よく耳にする「祖国の建設に尽力したい」という言葉ではなく、「戦時中の毎日の空襲警報が常に高度の緊張状態を強い、それに耐えられなかったから」という飾り気のない返事が返ってきたが、これはとても意外な感じがした。

周知の通り、多くの海外留学経験者は文化大革命中、民衆運動の的となって糾弾され、迫害を受けた。そのため、彼らの多くは過去のことに口を閉ざしている。私達はこの話題を提起すべきかどうか迷ったが、質問することにした。しかし、鮑氏は終始淡々たる語調で話しをされ、少しの悔いも恨みも無いという様子だった。

これに対して、同年9月9日、広州で聞き取りをした余志強氏（1924年生、原籍広東省。1942年10月「外国人特別入学」として農学部に入学）は、日本政府の給費を受け、留学したことで文化大革命中に糾弾されたことが、やはり大きな影響を与えているように思われた。インタビューの「録音」には消極的であり、筆者が留学生の回想、経験談の重要性を力説し、改めてお願い

したら「録音」をお許しいただけた。お二人のインタビュー記録は、研究成果報告書（折田悦郎編『九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究』）の一部として印刷されている。詳細については、そちらをご覧いただきたい。

ところで、日本とアジアとの関係は非常に深く、長い歴史を持っている。両者の歴史関係については政治史、経済史、外交史等、各方面から優れた研究が蓄積されているが、近代日本における留学生受け入れは、両者の関係史の研究においても決して欠かせない視点であり、切り口でもある。日本の留学生に対する態度、行った教育はそのアジア認識を明確に示していると同時に、日本に留学してきた若者達の日本に対する「思い」の中には、アジア諸地域の日本認識が現れている。このような相互認識が形成されてきた過程を明らかにすることによって、両者の関係実像を正確に描き出すことができるのではないか。なぜなら、とりわけ戦前という特殊な時期においては、「留学」は単なる個人行為に止まらず、日本の国策、あるいは母国と日本（留学先）との関係等、様々な次元の要素を数多く含んでいると思われるからである。

従来、近代日本の留学生研究については、政府の受け入れ政策、各校別の受け入れ状況、留学生の民族・革命運動等の面から研究されてきた。それらの研究で用いられたのは、外交史料館、国立公文書館、各図書館、各学校に保存されている諸史料群であった。そこからは制度、政策等のハード面はよく判るが、反面、留学の主体となった留学生の個々としての体験、自分の目で見、感じたことはなかなか窺うことができないという面があった。筆者自身も明治専門学校（現九州工業大学）を素材にして大正期の留学生受け入れのあり方を検証し、さらには留学生本人の手紙、投稿等を分析してその心情の解明等を試みたことがあったが、史料不足の感はどうしても否めなかった。そこで考えられる解決方法は、元留学生への聞き取り調査である。インタビュー中に語られるのは、当事者の価値観、見解、感情ももちろん含まれるが、しかし当事者、いわゆる歴史の目撃者・経験者の記憶に基づくもので、生々しい史料として大きな意味を持つ。これらの生きた史料は、文字史料からは得られない、たとえば母国と留学先の挟間で留学生が感じ考えた心情や、彼らが持った日本観だけでなく、日本人のアジア観の析出も可能にする。聞き取り（インタビュー）は—特に留学生研究においては—、新たな研究方法として極めて有効であると言えよう。それにしても、今回のインタビューでしみじみと感じたのは、戦前期の留学生達への聞き取り調査の緊迫性である。元留学生達の高齢化については、一刻の猶予も許されないと思う。

余志強氏

最後にインタビューを受けて下さった両老の近況について付言して、小論を終わることにしたい。鮑耀東氏は、中国の著名な脳神経外科医として83歳の現在でも週三回の回診を行っている。余志強氏は、1987年の定年から今日まで、広東省農業科学院蔬菜研究所の顧問として広州市郊外に駆けつけ、野菜の育種・栽培に力を尽くされている。彼らのように色々な苦難と戦いながら生き抜いてきた元留学生達は、留学先の日本と母国の国交の架け橋として、また各分野の専門家として活躍されている。チャンスがあれば、是非再度お話を伺いたい。

（チェン・ハオ／九州大学大学院人間環境学府
発達・社会システム専攻博士後期課程）

# 広島大学文書館の特色

小宮山　道　夫

## 大学史編纂と大学アーカイブズ

広島大学文書館（ぶんしょかん）は「広島大学にとって重要な文書の保存・整理並びに大学の歴史に関する記録の収集・整理・保存及び公開を行うとともに、関連する分野の教育研究を行うこと」を目的とする広島大学のアーカイブズ組織である。

広島大学文書館は、1998（平成10）年に設置された50年史編集室を前身としている。大学アーカイブズが年史編纂機関を前身にもつことは通例のようになっているが、広島大学の場合は多少変則的な設置経緯を持つ。それは年史編纂の完了を待たずに文書館を発足させたことである。このため文書館は現在、本来の業務の他に、50年史編纂事業を継承し、現在も進行中である。

年史編纂組織と大学アーカイブズ組織は、それぞれの業務の遂行上密接な関係を持つことはあっても、組織の目的や機能からして本来全く別種の組織である。このため文書館が50年史編纂を兼務していることは異例であり問題もある。この原因は学内事情に他ならないが、結果的には大学アーカイブズが、年史編纂後の資料の受け皿確保という次元の機関として成立するのではなく、大学の運営上必要な組織として成立する例を提示できたと、肯定的に考えている。

広島大学文書館

## 文書館と広島大学の文書管理

広島大学の大学アーカイブズ組織を構想するにあたっては、九州大学をはじめ資料保存について先行している大学の例を大いに参考にすることができた。そのなかでも特に参考としたのは京都大学だった。それは非現用文書のすべてを大学文書館が所管するという前例のないシステムを持っていたためである。大学文書館を大学文書のライフサイクルに明確に位置づけた京都大学のシステムは、その画期性において魅力的であった。しかしこのシステムを広島大学に導入するのは、スペース・人員・経費、いずれの点でも確保が難しく現実的ではなかった。そのため、構想段階では事務局が非現用・半現用文書の倉庫としていたスペースを文書館の書庫として管理替えし、そこにある文書の管理を行うという案を打ち出したこともあった。

広島大学では法人化後の文書管理規則の検討にあたり、現文書館長小池聖一（当時文書館設立準備室長）の参画を要請し、新たに広島大学法人文書管理規則を制定した。検討の際には、文書館を文書のライフサイクルに明確に組み込み、同時に大学の文書管理全体の大幅な見直しを図る提案を行った。成立した同規則において、文書館は非現用文書の保存機関として明示されるとともに、半現用文書の受け入れ保存も可能となった。また、文書の廃棄にあたっては文書館へ報告することが義務づけられた。これにより広島大学はそれまで不明確であった半現用・非現用文書の取扱いを規定し、文書管理の基盤整備を遂げたと言えよう。ただこれは基盤に過ぎず、文書館がアーカイブズとして十全に機能するか否かは、ひとり文書館の働き如何というものでもない。現実的には、文書の保存状態は原局の文書の取扱いに依存する以上、文書の作成から非現用化までの各過程において、文書に接する職員ひとりひとりの意識を改め、事務組織全体が文書のライフサイクルを見すえる姿勢を実体化させることが今後の目標となるだろう。

## 二室体制という新たな組織形態

文書館の最大の特徴は、内部組織として公文書室と大学史資料室との二室を設置したことである。二室のうち公文書室は大学の公的記録類（これまでの行政文書と法人化以降の法人文書）を、大学史資料室は森戸辰男関係文書をはじめとする大学関係者の個人資料や、広島大学の沿革に関する記録、大学史に関わる公刊物等をそれぞれ所管する。

この二室体制の利点は、年史編纂を契機として成立してきた従来型の資料室の機能と、大学の公文書館としての機能とを、一つの組織に包括し、資料保存という共通の目的達成に二つの方向から取り組むことができるところにある。この体制は、恐らく他の大学が従来型の資料室をアーカイブズ組織へと改編しようとする際の原型になりうるものと考えている。それは従来型の資料室と公文書館との性格の違いを共存させるのに有効だからである。また両者が周囲からはとかく事務組織と教育研究組織とのどちらかに色分けされがちであり、多くの場合は教育研究組織として大学の文書管理から隔絶されてきたのに対し、事務組織寄りの公文書室と、教育研究組織寄りの大学史資料室とが協調して事業に取り組むという新たな形態を提示している。このため文書館は文書管理のルートに位置づけられるとともに、教員を配置する合理性を得られるのである。

### 文書館のスタッフと施設

文書館の職員（館員）は、規定上では館長（兼任）、専任教員、その他必要な職員で構成している。これに加え、まだ実態はないが、学内外の専門家で固める調査員と称する兼任スタッフを置き文書館の機能を高めることにしている。現在の職員構成は、館長、専任教員１(助手)、その他職員２(教務補佐員、事務補佐員各１）の専任職員総計３名である。現在のところ想定する業務に比べ非常に小規模な組織であり、アーカイブズ機能を維持するには、今後の専任職員の拡充が不可欠である。

大学史資料室の書庫群

文書館の運営に関しては、文書館長を委員長とし、図書館部長、総務部長、文書館の専任教員を主要メンバーとする運営委員会を設けている。委員構成が文書館員の専門性と自主性とを重視した必要最小限の委員構成に留められている点は、各部局等の代表者で構成する従来の他の学内共同教育研究施設の運営体制とは一線を画している。

文書館の施設は、教育学部の音楽棟として使われていた独立建物の一階部分、総面積591㎡を占有している。建物の構造上、実質面積はかなり落ちるが、全室二重窓で壁が厚く、防音効果と外気温の遮蔽性に優れている。また、十分な荷重設計がなされており、書架の設置に適している。偶然ながら文書館向きの建物である。とりわけ特徴的なのは、80㎡の講義室を転用した公文書室書庫と、６㎡の個人用練習室を転用した大学史資料室の書庫群である。公文書室書庫には５連９台の移動式書架を導入して、文書の集積に役立てている。大学史資料室の書庫群は11室からなり、個人資料や組織ごとに資料を分類整理するのに適している。

### 文書館の教育・研究活動

文書館の教育・研究活動については、九州大学大学史料室の活動に学ぶところが多く、全学対象の自校史授業「広島大学の歴史」(教養的教育科目)も50年史編集室当時の2001（平成13)年から毎年継続している。将来的には全学必修や教職員の研修などに拡大する構想である。また集積した資料の公開に努め、2004（平成16)年度にはすでに３つの資料展を開催した。研究会やシンポジウム等の開催も不定期ながら積極的に行う予定である。今年の11月７日には下記のとおり学外から第一級の講師を招き、文書館の特徴である公文書室と大学史資料室との二室体制の持つ機能に関わる公開シンポジウムを開催する。

広島大学文書館設立記念公開シンポジウム
　テーマ「文書館における学問と社会的役割」
　日時　2004年11月７日（日）
　　13時～16時30分
　会場　広島大学図書館
　　中央図書館１階　ライブラリーホール
　講演題目
　　小池聖一「広島大学文書館のめざすもの」
　　大濱徹也「貌としてのアーカイブズ」
　　伊藤　隆「個人文書の現状と課題」

**大学を映す鏡「大学アーカイブズ」**

広島大学文書館は、2004（平成16）年4月に発足した。前九州大学大学史料室長有川節夫（現理事・副学長）氏が昨年の広島大学での講演で明言した「アーカイブズのない大学は大学にあらず」との言葉に従えば、広島大学はようやく大学としての一歩を踏み出したといえるのかも知れない。筆者は、先日とある理系の方が多い学会で、ある年配の会員と挨拶を交わした。文書館の紹介をすると、文書館のことを「まさに大学そのものですね」と評されたのが非常に印象に残っている。海外の大学アーカイブズに接したことのある人の中には、文書館をそのように理解する人もいると思うと、非常に勇気づけられるとともに、その責任の重さに恐ろしさをも感じた。このような期待に応えるために、地道な活動を続けて学内外に揺るぎない信頼を築くことこそ、文書館に課された義務であろう。今後とも広島大学文書館にご期待いただきたい。

（広島大学文書館助手）

## 九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿

| | | | |
|---|---|---|---|
| 委員長 | 理事 | 副学長 | 今西裕一郎 |
| 副委員長 | 人環院 | 教授 | 新谷　恭明 |
| 委員 | 人文院 | 助教授 | 山口　輝臣 |
| 〃 | 比文院 | 助教授 | 中野　等 |
| 〃 | 言文院 | 助教授 | 高橋　勤 |
| 〃 | 歯院 | 教授 | 飯島　忠彦 |
| 〃 | 歯院 | 教授 | 前田　勝正 |
| 〃 | シ情院 | 教授 | 長谷川隆三 |
| 委員 | 農院 | 教授 | 江頭　和彦 |
| 〃 | 先導研 | 助教授 | 本山　幸弘 |
| 〃 | 博物館 | 教授 | 岩永　省三 |
| 〃 | 情基セ | 教授 | 藤野　清次 |
| 〃 | 健セ | 教授 | 橋本　公雄 |
| 〃 | 総務部 | 部長 | 安間　敏雄 |

（2004年10月1日現在）

## 九州大学大学史料室名簿

| | | | |
|---|---|---|---|
| 室長 | 理事 | 副学長 | 今西裕一郎 |
| 副室長 | 人環院 | 教授 | 新谷　恭明 |
| 専任 | | 助教授 | 折田　悦郎 |
| 兼任 | 人文院 | 助教授 | 佐伯　弘次 |
| 〃 | 比文院 | 教授 | 有馬　學 |
| 〃 | 法院 | 教授 | 植田　信廣 |
| 兼任 | 法院 | 助教授 | 熊野　直樹 |
| 〃 | 経院 | 教授 | 荻野　喜弘 |
| 事務職員 | | | 北島　一孝 |
| 事務補佐員 | | | 松尾　陳代 |
| 〃 | | | 筑紫　啓子 |

（2004年10月1日現在）

## 受贈図書一覧（2004年1月～2004年6月）

能古　第42号
　九州大学理学部地球惑星科学教室内能古会　2003.12

湯地署長（元寇記念碑の由来）
　野上伝蔵　1959.12

「エネルギー史研究」―石炭を中心として―
第十九号
　九州大学石炭研究資料センター　2004. 3

石炭研究資料叢書　第25輯
　九州大学石炭研究資料センター　2004. 3

教育基礎学研究　創刊号
　九州大学大学院人間環境学府　教育哲学・教育社会史研究室　2004. 3

学士鍋　第129号、第130号
　九州大学医学部同窓会　2003.12、2004. 3

第26回日本医学会総会会務記録
　第26回日本医学会総会記録委員会　2004. 2

生物兵器と化学兵器
　井上尚英　2003.12

北大百二十五年史　通説編

北海道大学百二十五年史編集室　2003.12
北大百二十五年史　論文・資料編
北海道大学百二十五年史編集室　2003.12
東北大学百年史　八　資料一
東北大学百年史編集委員会　2004. 3
近代史料研究　第三号
日本近代史研究会・筑波大学歴史・人類学系中野目研究室　2003.10
東京大学史史料室ニュース　第32号
東京大学史史料室　2004. 3
横浜国立大学教育学部の歩み
横浜国立大学教育人間科学部　2002. 3
金沢大学資料館資料目録１　金沢大学資料館収蔵第四高等学校物理機器図録
金沢大学資料館　2004. 1
金沢大学資料館だより No.23
金沢大学資料館　2004. 1
名大史ブックレット８　岡崎高等師範学校―新制名古屋大学の包括学校③―
山口拓史著 名古屋大学大学史資料室　2004. 3
名古屋大学大学史資料室保存資料目録（教育関係資料）第四集
名古屋大学大学史資料室　2004. 2
名古屋大学大学史資料室ニュース　第16号
名古屋大学大学史資料室　2004. 3
名古屋大学史紀要 第12号
名古屋大学大学史資料室　2004. 3
京都大学大学文書館だより　第６号
京都大学大学文書館　2004. 4
京都大学大学文書館研究紀要　第２号
京都大学大学文書館　2004. 2
京都大学七十年史
京都大学創立七十周年記念事業後援会 1967.11
コリーグ　No.37
広島大学高等教育研究開発センター　2004. 5
大学論集（2003年度）　第34集
広島大学高等教育研究開発センター　2004. 3
高等教育研究叢書76　問題解決能力の育成をめざした授業の設計と実践―開発したワークブックを用いて―
広島大学高等教育研究開発センター　2004. 1
高等教育研究叢書77　欧州の高等教育と労働市場
広島大学高等教育研究開発センター　2004. 3
高等教育研究叢書78　大綱化以降の学士過程カリキュラム改革―国立大学の事例報告―
広島大学高等教育研究開発センター　2004. 3
高等教育研究叢書79　諸外国の大学職員《米国・英国編》
広島大学高等教育研究開発センター　2004. 3
広島大学史紀要　第六号
広島大学文書館設立準備室　2004. 3
広島大学五十年史 上・下 資料編
広島大学50年史編集室　2003. 3
大阪市立大学恒藤記念室所蔵資料目録
大阪市立大学学術情報総合センター　2002. 3
人文論集 第39巻第３・４号
神戸商科大学学術研究会・神戸商科大学経済研究所　2004. 3
半世紀　学習院女子短期大学史 通史・資料編
学習院女子短期大学史編纂委員会　2003. 3
校史　Vol.15
國學院大學校史資料課　2003.11
駒大史ブックレット２　「宣教部日誌」にみる大正期の駒大生　その１
駒澤大学禅文化歴史博物館大学史資料室　2004. 3
創価教育研究　第３号
創価大学創価教育研究センター　2004. 3
拓殖大学百年史研究　13号、14号
拓殖大学創立百年史編纂室　2003.12、2004. 3
玉川大学教育博物館館報　2002年度　創刊号
玉川大学教育博物館　2004. 3
玉川大学芸術学科教員作品展
玉川大学教育博物館　1997.10
イコン図録
玉川学園教育博物館　1987.
別冊　イコン図版解説
玉川学園教育博物館　1987.
日本女子大学学園史ニュース　第６号
日本女子大学成瀬記念館　2004. 1
成瀬記念館　2003 No.18
日本女子大学成瀬記念館　2003.12
法政大学と戦後五〇年
法政大学戦後五〇年史編纂委員会　2004. 3
法政大学と戦後五〇年　別冊（年表・資料・体育会活動略史・索引）
法政大学戦後五〇年史編纂委員会　2004. 3
武蔵野美術大学大学史史料集　第四集　『申請書等』
大学史史料委員会　2004. 3
駿台学の樹立　大学史紀要 第８号
明治大学史資料センター　2003.12
第15回　明治大学小史展　草創期明治法律学校を支えた人々

明治大学史資料センター事務室　2004.2
明治大学史資料センター事務室報告　第二十五集
大学史資料センターの開設
明治大学大学史資料センター事務室　2004.3
立教学院史研究　第2号
立教大学立教学院史資料センター　2004.3
神奈川大学会議録（五）神奈川大学史資料集
第二十集
大学資料編纂室　2004.3
関東学院学院史資料室ニューズ・レター　第4号
関東学院学院史資料室　2004.4
大谷大学百年史　資料編別冊　戦時体験集—「学徒出陣」・「勤労動員」の記録—
大谷大学真宗総合研究所・真宗学事研究班・宗学事史研究　2004.3
新島研究　第95号
同志社大学人文科学研究所・同志社社史資料室
2004.2
函館からボストンへ　新島襄「脱国140年」記念—Neesima Room　第25回企画展—
同志社大学人文科学研究所内同志社社史資料室
2004.4
立命館百年史紀要　第十二号
立命館百年史編纂委員会　2004.3
龍谷大学史報　Vol.4
龍谷大学大学史資料室　2004.1
桃山学院年史紀要 第二十三号
桃山学院年史委員会　2004.3
関西学院史紀要 資料集Ⅰ　旌忠碑
プレート起草委員会・関西学院学院史編纂室
2004.2
関西学院史紀要　第十号
関西学院学院史編纂室　2004.3
学院史料　Vol.19
神戸女学院史料室　2004.3
大学アーカイヴズ　No.30
全国大学史資料協議会東日本部会　2004.3
研究叢書　大学資料をめぐる現状と課題　第4号—2002年度全国研究会の記録　於：北海道大学—
全国大学史資料協議会　2003.12
全国大学史資料協議会西日本部会会報　No.16
全国大学史資料協議会西日本部会　2004.5
全国歴史資料保存利用機関連絡協議会会報　第67号、第68号
全国歴史資料保存利用機関連絡協議会
2004.3、2004.3
海外におけるアーキビスト養成に関する調査報告(1)
全国歴史資料保存利用機関連絡協議会専門職問題委員会　2003.3
アーカイブズ　第14号
国立公文書館　2004.3
史料館報　第80号
国文学研究資料館史料館　2004.3
広島県立文書館だより 第二十三号
広島県立文書館　2004.1
福岡市総合図書館研究紀要　第4号
福岡市総合図書館　2003.3
平成十四年度　古文書資料目録 八
福岡市総合図書館文学・文書課　2003.3
文明のクロスロード Museum Kyushu　第20巻第1号、第20巻第2号
Museum Kyushu編集委員会　2003.5、2003.12
DJIレポート　No.55～No.57
国際資料研究所　2004.2～2004.6
野間研だより No.14、No.15
野間教育研究所　2003.12、2004.4
ビルメンテナンス　39巻6号
全国ビルメンテナンス協会　2004.6
記念館だより 第32号、第33号
旧制高等学校記念館・旧制高等学校記念館友の会
2004.3、2004.6
旧制高等学校記念館十年のあゆみ（改訂）
旧制高等学校記念館・旧制高等学校記念館友の会
2003.5
青陵会会報 復刊第二号
青陵会　2004.1

＊大学史・高等教育史、アーカイブ関係図書を中心に受贈図書の一部を掲載した。

## 大学史料室日誌抄録（2004年1月～2004年6月）

1.8（木）　第32回九州大学史料収集・保存に関する委員会開催。
大学院人間環境学府学生、資料調査のため来室（1月13日、16日、27日、2月12日も同様）。
1.10（土）　第1回「21世紀のアーキビスト研究

会」開催、新谷恭明副室長・折田悦郎助教授参加（於石炭研究資料センター）。

1.13（火）　安間敏雄総務部長、白石寛治総務課専門員、大学史料室視察のため来室。

1.22（木）　医学部百年史編集委員会事務局より資料閲覧のため来室（1月23日、3月10日も同様）。

1.26（月）　兵庫文学館より九州帝国大学医学部関係資料の件につき照会、資料送付。

1.28（水）　法学部事務部図書掛より資料調査のため来室。

1.29（木）　小野雅章日本大学文理学部助教授、冨士原雅弘同助手、大学史料室視察のため来室。
広島大学文書館設立準備室より文書管理規程等の件で照会、資料送付。

1.30（金）　九州大学医学部同窓会より来室、資料寄贈。

2.2（月）　井上尚英名誉教授より資料寄贈。

2.5（木）　岡崎敦大学院人文科学研究院助教授、資料閲覧のため来室。

2.16（月）　古賀克己大学院農学研究院教授より資料寄贈。

2.17（火）　読売新聞記者、取材のため来室（2月24日、26日も同様）。

2.18（水）　第3回大学アーカイヴズ研究会（於京都大学大学文書館）、折田助教授、片山事務官、白石総務課専門員、上野事務官（総務課広報担当）参加。

2.20（金）　第26回日本医学会総会事務局より資料寄贈。
水崎雄文氏（文学部卒業生）、資料調査のため来室（2月23日、6月29日も同様）。

2.24（火）　榑松かほる桜美林大学資格・教職教育センター教授、資料調査のため来室。

2.25（水）　総務課秘書掛より事務局玄関レリーフの件につき照会、回答。

2.26（木）　牛房忠夫氏（元本学事務官）来室、資料寄贈。
折田助教授、中野仁雄副学長に面談（ド・ヴィルパン仏国外相講演会関係資料の件）。

2.27（金）　総務課総務掛より資料受領（各種廃棄公印）。
文部科学省福岡工事事務所より資料寄贈。

3.2（火）　理学部等事務部庶務掛より資料閲覧のため来室（6月8日も同様）。

3.3（水）　松井俊規・斉藤一馬氏（青陵会会員）、来室（3月12日、18日も同様。「青陵の泉」像等保存の件）。
斉藤一馬氏より資料寄贈（3月12日も同様）。

3.5（金）　九州大学ジャズ研究会に資料貸し出し。

3.8（月）　小泉直彦氏（荒川文六第六代総長令孫）より資料寄贈（3月10日、15日、6月14日も同様）。

3.9（火）　西田迪雄大学院工学研究院教授より資料寄贈。

3.11（木）　第8回文書館設置準備委員会開催（新谷副室長出席）。
第22回文化財ワーキンググループ開催（折田助教授出席）。

3.15（月）　保田その京都大学大学文書館助手、資料調査のため来室（3月16日も同様）。
総務課広報担当よりUIデザイン等の件につき照会、回答。

3.17（水）　文部科学省福岡工事事務所より来室、資料貸し出し。

3.19（金）　稲井裕子大学院歯学研究院助手より旧制福岡高等学校の件につき照会、回答（3月22日、23日も同様）。

3.23（火）　医療技術短期大学部事務部より資料移管。
牟田敏雄氏(白菊会理事)、資料寄贈のため来室（3月24日、4月5日も同様）。

3.24（水）　岡田千秋愛知学院大学教養部教授、大学史料室視察のため来室（3月25日も同様）。
理学部等事務部学生掛より資料移管。

3.29（月）　大久保全陸大学院芸術工学研究院教授より資料寄贈。
望田研吾大学院人間環境学研究院教授より資料寄贈。

3.31（水）　『九州大学大学史料叢書』第12輯、『九州大学大学史料室ニュース』第23号、『大学アーカイヴス機能についての基礎的研究―「大学改革」と

の関連において—』（平成14・15年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）研究成果報告書）、『九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究』（平成14・15年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）研究成果報告書）刊行。
有川節夫室長（副学長）、退任。
東定宣昌石炭研究資料センター教授（大学史料室兼任教官、元史料収集・保存に関する委員会副委員長）、山野善郎大学院人間環境学研究院助教授（大学史料室兼任教官）、片山昌彦事務官退官。

4．1（木）　今西裕一郎理事（副学長）、大学史料室長に就任。
北島一孝氏（前法学部事務長）再任用。
九州大学情報公開委員会規則制定。
九州大学大学史料室規則制定。
九州大学大学史料室利用規程制定。
折田助教授、柴田洋三郎理事（副学長）に面談（留学生名簿の件）。

4．8（木）　二見剛史志學館大学人間関係学部教授より資料寄贈。
理学部地質学科地球惑星科学科同窓会より資料寄贈。

4．14（水）　2004年度前期「大学とは何か—ともに考える—」開講。

4．15（木）　第33回九州大学史料収集・保存に関する委員会開催。
平成16年度大学史料室予算要求書提出。

4．16（金）　吉本清一医療技術短期大学部元教授、資料調査のため来室（4月23日、5月6日、10日、6月22日も同様）。

4．26（月）　医学部百年史編集委員会事務局より資料寄贈（6月30日も同様）。

5．11（火）　妹尾泰利名誉教授、来室。
岩佐昌暲大学院言語文化研究院教授、資料調査のため来室。

5．13（木）　福岡市東区東箱崎公民館（ふれあい大学）より大学史料室視察等のため来室（36名）、折田助教授講演。

5．28（金）　山口宗之名誉教授より資料寄贈。

6．4（金）　西村安博同志社大学法学部助教授、大学史料室視察のため来室。

6．8（火）　社団法人全国ビルメンテナンス協会（『月刊ビルメンテナンス』）より工学部本館及び本部事務局建物の件につき照会、回答。

6．9（水）　西日本新聞記者、取材のため来室。

6．18（金）　小泉直彦氏（荒川文六第六代総長令孫）、梶山千里総長を表敬訪問（折田助教授列席、説明）。

6．25（金）　矢内秋生武蔵野大学人間関係学部教授、進研アド大学情報センター利根川恵子氏、取材（『Between』9月号）のため来室（新谷副室長・折田助教授応対）。
医学部同窓会史料・史跡委員会開催（折田助教授出席）。

6．28（月）　矢田俊文名誉教授（元副学長）来室、資料寄贈。

九州大学大学史料室ニュース　第24号
Kyushu University Archives

発行日　2004年10月31日（年2回刊）
編集
発行　九州大学大学史料室
〒812-8581 福岡市東区箱崎6－10－1
電話・FAX　(092) 642-2292
印刷　株式会社ミドリ印刷